

The why, who, and how of social comparison: A social-cognition perspective.

なぜ、誰、どうする社会的比較:社会的認知の視点から

Mussweiler, T., Ruter, K., and Epstude, K. (2006). The why, who, and how of social comparison: A social-cognition perspective. In Guimond, S. (Ed). *Social Comparison and social psychology. Understanding cognition, intergroup relations and culture.*. University Press. Cambridge, Pp. 33-54.

Rep. 小森めぐみ¹.

人はいつでも比較する

- ・ 人間は頻繁に社会的比較に従事する。私たちは社会的比較を行うことによって自分のことも、他人のことも理解する。他者との比較は私たちに備わる頑健・基本的でユビキタスな性癖。
 - 自分に有意義な情報を与えないような比較であっても (Gilbert, Giesler, and Morris, 1995)
 - その場にはいない相手 (意識に上らないような) でも (Mussweiler, Ruter and Epstude, 2004a)
- ・ 比較は自分を含むとは限らない。人は自分を他者と比べるだけでなく、何らかの情報を処理するときには、その情報=ターゲットを何らかの基準と比較する。
 - ターゲットはどれくらい攻撃的かと尋ねられればアクセシブルな基準とターゲットを比べて判断する (Herr, 1986)
- ・ 比較はステレオタイプ化 (Biernat, 2003; Biernat and Manis, 1994)、態度 (Sherif and Hovland, 1961)、対人知覚 (Herr, 1986; Higgins and Lurie, 1983)、感情 (Higgins, 1987) など多岐に渡る領域で中心的役割を果たす。人はターゲットを評価したり、ターゲットの情報を処理するときには、必ず比較に携わる。

本章の目的

- ・ 本章の目的は、社会的認知の他の分野の原理を社会的比較、比較処理の研究にあてはまること (類似のアプローチについては Blanton, 2001; Mussweiler and Strack, 2000a, 2000b)
- ・ 特に社会的認知の分野で中心的な二つの原理—**認知的効率性 (cognitive efficacy)** と **知識のアクセシビリティ (knowledge accessibility)**—の知見から社会的比較を検討する。これにより、社会的比較の why, who, how を理解できる。

Cognitive efficiency in social comparison. (p. 34)

認知的効率性から比較を考える

- ・ 人間は“認知的節約家 (cognitive miser, Taylor, 1981)”であり、限りある認知資源を効率よく使用していかなくてはならない。
- ・ 意思決定の前にはより精緻な情報処理を行うことが賢明だが、人間の時間、知識、注意、認知資源には限りがあり、そのような方法はとることができないのが現実 (Simon, 1956, Klein, 2001; Nisbett and Ross, 1980)。人はこの問題を解決し選択を最適化するために、自分の満足できる範囲の選択肢を利用する。
- ・ 社会的比較が頻繁に行われるものならば、それは認知資源をほとんど使用せずに行える効率性の高いプロセスであって、最適ではない状況においても簡単に行うことができるはず。

¹ 一橋大学大学院博士課程.

- ・ 社会的比較は戦略的なプロセスで、特定の動機や目標を満たす為の戦略的処理とみなされがち。目的を満たすためには比較基準を慎重に選ぶ必要があり、適当な基準選択には代償が伴う。
 - 例) 類似性にもとづく標準的選択プロセス(Festinger, 1954; Goethals and Darley, 1977) 特定の次元において類似する基準を見つけるためにはさまざまな次元、潜在的基準、評価基準を考慮する必要があり、非常に困難(Festinger, 1954; Goethals and Darley, 1977; Wood and Taylor, 1991)。
- ・ 以下では、社会的比較に認知的効率性の原理をあてはめることによって、認知資源が少ないにもかかわらず、誰との比較過程に従事しているかについて考えていく。

The why of social comparison: efficiency advantages of comparative information processing. (p.36)

なぜそこまで私たちは比較をするのか?

- ・ Musweiler and Epstude (2005)は私たちが比較するのは、比較処理は絶対処理よりも効率的に情報処理を行うことができるからと主張。
 - 比較を行うことによって、ターゲットの評価や判断をする際に考慮すべき情報を制限できる。
 - 例) 自分の運動能力を評価する
 - 絶対処理を行う場合:すべての運動(走る、泳ぐ、バスケ、サッカー、etc...)について自分がどうであるかを考えなくてはならない
 - 比較処理を行う場合:比較の基準となるもの(例えば友人)と関連の深い次元でだけ処理を行えばいい(友人がランナーであれば、走る能力だけを比較し、バスケの能力は考慮しない)。
- ・ Musweiler and Epstude (2005)では手続プライミング(Smith, 1994)を利用して、比較処理が効率性が高いことを示した。
 - 参加者はペアになった絵を見せられ、それを比較/描写した。その後架空の都市を複数の次元で評価させたところ、ペアの絵を比較した参加者のほうが処理に必要な時間が短く、その次の課題の成績もよかった(資源が余っていたため)。
- ・ 社会的比較が私たちの情報処理において中心的役割を果たすのは、限りある資源を有効活用するためだったといえる。社会的比較は認知的効率性の向上に貢献する。

The who of social comparison: efficiency advantages of routine standard use. (p.38)

社会的比較とルーティンの使用

- ・ 多くの研究(see Suls and Wheeler, 2000)において、比較基準選択のプロセスは自己高揚、自己改善、自己評価などの動機に基づく戦略的な考えの影響を受けることが指摘されている。しかし、このプロセスにおける認知的効率性の話は皆無。
- ・ 複雑な意思決定を単純化するためのツールにルーティン(routine)があげられる(e.g., Aarts and Dijksterhuis, 2000; Betsch, Haberstroh, Glockner, Haar, and Fiedler, 2001; Verplanken, Aarts, van Knippenberg, and van Knippenberg, 1994)。
 - ルーティン:特定の意思決定の問題とその問題への解決法の強い連合にもとづくもの。意思決定プロセスにおいて同じ選択を行うことは問題と解決法の連合を強める(Aarts and Dijksterhuis, 2000; Bargh, 1990)。ルーティンをあてはめることにより処理の効率が上がる。

- ・ もしも戦略的に比較基準を選んでいけば(e. g., Festinger, 1954; Goethals and Darley, 1977)、すべての比較基準の中から最適なものを選ばなくてはならないがそれではそれは非効率的(Selten, 2001)。でも、ルーティンを用いれば、より効率的に比較基準を選択することができる。
- ・ Mussweiler and Ruter (2003)は、自然にできたルーティンの基準(親友)や実験的に作り出した基準が社会的比較で利用されることを示した。
 - 【研究1】他者のさまざまな次元との比較に基づいて自己評価をした後、友人/元友人の名前の語彙決定を行わせた。その結果、友人の語彙決定課題への反応時間が短縮された。
 - 【研究3】参加者は比較処理の後で類似の知り合いよりも非類似の親友の判断を速く行った。これは参加者が自己評価の過程で親友がその判断次元においてどうかという情報を活性化させていたことを示唆する。つまり参加者はより精緻な基準選択プロセスを経ることなく、使い慣れている基準を利用したといえる。

ルーティンのもう一つの効用

- ・ ルーティンには練習効果があり、ルーティンを利用することで比較プロセスそのものの効率性がどんどん高まるという利益がある。
- ・ Ruter and Mussweiler (2005)では、日常で形成されたルーティンの基準=親友(実験的に形成したルーティン)と自己の比較はそれ以外の基準=元友人と自己の比較よりも速く行われることを示した(see also Smith, 1989, Smith and Lerner, 1986; Smith, Branscombe, and Bormann, 1988)
- ・ つまり、情報を効率よく処理して認知資源のムダを減らすという私たちの基本的欲求は、社会的比較においても重要な役割を果たしている。

Accessibility in social comparison. (p.40)

- ・ 社会的比較に応用したい社会的認知の原理の二つ目は**アクセシビリティ**である。多くの研究(for reviews see Higgins, 1996; Wyer and Srull, 1989)が人は判断に必要な情報のすべてを利用するわけではないことを示している。
- ・ これは認知的効率性の話とも矛盾しない。効率性を高める為に、人は知識を選択する。アクセシビリティはその知識の選択に貢献する。
- ・ この原理を応用して社会的比較が自己知覚、自己評価にどう影響するのかを概念化する。

The how of social comparison: mechanisms of selective accessibility. (p.41)

選択的アクセシビリティ

- ・ 社会的比較が自己に影響する過程について理解するためには、それがどのように自己知識のアクセシビリティを変化させるかを検討しなくてはならない。社会的比較はどの知識をアクセシブルにして、頻繁に使われるターゲット評価のベースとするかに影響を及ぼす。
- ・ この判断に関係する知識を探索、活性化していくプロセスは**選択的アクセシビリティメカニズム**(selective accessibility mechanism, Figure2-1)であると考えられる。
 - 社会的比較に従事する為には、まず自己と比較基準についての情報を得る必要がある。これは仮説検証プロセスを通じて積極的に探索される(Trope and Liberman, 1996)。
 - この仮説検証プロセスは一つの仮説を選び取り、それを特定の評価基準に対して評価すると

いう形で行われる(Sanbonmatsu, Posavac, Kardes, and Mantel, 1998; see also, Klayman and Ha, 1987; Trope and Liberman, 1996)。

- 仮説には類似仮説と非類似仮説の二種類があり、二つは区別する必要がある。

事前テスト

- ・ 二種類の仮説のうちどちらが検証されるかは、自己と比較基準とのあいだの知覚された全体的な類似性に基づく。判断者はわずかな特徴(後述)を考慮して自己と比較基準が全体的に類似か非類似かを決定する。非類似の特徴がなければ、自己と比較基準は似ていると査定されやすい。
- ・ 判断者はターゲットと類似している基準を選び出しやすく(Festinger, 1954)、比較をする前に共有基盤を構築しやすいため(Gentner and Markman, 1994)、デフォルトは類似性検証。非類似性検証は自己と評価基準を分かち明確な基準がある場合にのみ行われる例外といえる。
- ・ 事前の全体的な類似性判断には顕現性が高く、処理しやすく、後の仮説検証に役立つと考えられる**カテゴリ一所属**と**基準の極端さ**が使われる。所属が同じ(Mussweiler and Bodenhausen, 2002)で極端ではない基準(Mussweiler, Ruter, and Epstude, 2004b)は類似性検証にすすみやすい。
 - 動機も影響する可能性があり、たとえば低い基準との比較を行う際、自己のポジティブイメージを保つ為に基準との違いに注目し、非類似性検証にすすむ場合もある。

仮説検証プロセス

- ・ 仮説検証の研究によると、一度仮説が選ばれるとその仮説に一致する証拠に注目が集まりやすい(Klayman and Ha, 1987 Snyder and Swann, 1978; Trope and Bassok, 1982; Trope and Liberman, 1996)。つまり、類似性検証にすすめば、基準に一致する自己知識が集められ、非類似性検証にすすめば、基準に一致しない自己知識が集められる=アクセシビリティが高まる。
- ・ それぞれの仮説検証でアクセシビリティが高まった自己知識は、後続の判断にも影響し、比較基準に一致する自己知識は**自己と比較基準の同化効果**を導き、一致しない自己知識は**自己と比較基準の対比効果**を導く。

Empirical support for selective accessibility. (p.44)

類似/非類似検証⇒基準への同化/対比

- ・ Mussweiler (2001) は上記の主張を参加者の注目する情報を操作することによって検討した。
 - 手続プライミングで類似/非類似のどちらにフォーカスさせるかを操作した。参加者は二枚の絵画の類似点/非類似点を挙げた。
 - 次に参加者は自分と大学への適応をしている比較基準またはしていない比較基準との比較を行った。
 - その後参加者は自分自身がどの程度大学生活に適応しているかを答えた。
 - その結果、構造の自己評価は事前にフォーカスしたものの影響を受けており、類似性に注目した参加者は基準への同化効果、非類似性に注目した参加者は基準からの対比効果を示していた(Figure2-2)。

基準への同化/対比⇒類似/非類似判断

- ・ 最近の研究(Mussweiler et al., 2004b)では、同化/対比的社会的比較は類似/非類似仮説検証

の実施につながることも示されている。

- 参加者は中程度／極端な比較基準と自分の運動能力を比較した後、自分の運動能力を評価し、最後にペアになった2枚の絵の類似性を評価させた。
- 中程度の比較基準は同化効果を生じさせ、ペアの絵の類似性判断は高かった。一方、極端な基準との比較は対比効果を生じさせ、ペアの絵の類似性判断は低かった。

仮説検証タイプ⇒アクセシビリティな情報の違い

- Mussweiler and Bodenhausen (2002)は同じカテゴリーに所属する者同士の比較では類似性仮説検証が行われやすいことを利用した。
 - 参加者は同集団／同集団でない比較基準と自分の比較を行わせ、特別な語彙決定課題 (Dijksterhuis et al., 1998)を用いてそれぞれの比較の後でアクセシブルになっている情報を調べた。
 - その結果、同集団の基準との比較の後では基準に一貫する自己知識がアクセシブルになっており、同集団でない基準との比較の後では基準に一貫しない自己知識がアクセシブルになっていた。つまり自己知識のアクセシビリティの変化が社会的比較の結果にも影響していた。

調整要因をアクセシビリティから考える

- 社会的比較はさまざまな形式で自己評価に影響する (for reviews see, Blanton, 2001; Collins, 1996; Mussweiler, 2003a, 2003b; Mussweiler and Strack, 2000b; Taylor, Wayment and Carrillo, 1996; Wood, 1989)。
- 比較基準との同化効果と対比効果がどのような条件で起きるのか、その調整要因も多岐にわたる (心理的親密さ Lockwood and Kunda, 1997; Pelham and Wachsmuth, 1995; Tesser, Miller, and Moore, 1988; 自尊心 Adinwall and Taylor, 1993; Buunk, Collins, Taylor, Van Yperen, and Dakof, 1990; カテゴリー所属 Blanton Crocker, and Miller, 2000; Mussweiler and Bodenhausen, 2002; Mussweiler, Gabriel, and Bodenhausen, 2000)
- どれも自己知識のアクセシビリティの違いとしてとらえることが可能。よって、自己知識のアクセシビリティの変化は社会的比較が自己に与える影響のしかたを左右しているといえるだろう。

Conclusion. (p.48)

- 本章では、認知的効率性と知識のアクセシビリティという二つの社会的認知の基本原理が社会的比較とどう関係しているかを述べた。どちらも社会的比較の性質の理解に貢献しており、なぜ社会的比較が行われるのか、誰と比較するのか、どうやって自己に影響しているのかを説明する。
- これによって明らかになった知見は、伝統的な知見と矛盾する場合もある。たとえば過去の研究では社会的比較は自己の診断的情報獲得のためと言われていたが (Festinger, 1954)、より効率的な形式で行われていた。また、過去の研究では人は自分と似た基準が選ばれやすいと言っていたが、ルーティンが影響することが示された。
- このように、社会的認知の知見は古典的な疑問に答えを与えることができる。社会的比較プロセスに社会的認知の知見をあてはめることで社会的比較の why, who, how がわかった。